

「理容所、美容所に於ける消毒薬の

使用状況について」

田 頭 政 直

【まえがき】

理容所、美容所に於ては使用器具を客毎にとりかえ消毒するよう法に規定されている。

各営業所に於ても消毒水が準備され器具の消毒が行われているが、然し中には調製後1～3ヶ月の消毒水もあり規定の濃度を保つて確実に消毒効果を上げているかどうか疑わしい。

そこで各営業所の消毒薬の使用状況、殊に最も多く使用されているクレゾール水の使用濃度及び調製後の日数について、調査した結果を報告する。

【調査結果】

(1) 使用消毒薬品名

	クレゾール	アルコール	ホルマリン	石炭酸	逆性石鹼	その他
理容所	40件 (100%)	22件 (55.0%)	23件 (57.5%)	8件 (17.6%)	0 0	0 0
美容所	60件 (100%)	22件 (36.6%)	29件 (48.3%)	4件 (6.6%)	3件 (5.0%)	0 0

(2) 試料調製後日数

	1～3日	4～7日	8日以上
理容所	12件 (30.0%)	13件 (32.5%)	15件 (37.5%)
美容所	35件 (58.3%)	20件 (33.3%)	5件 (8.4%)

(3) クレゾール水とりかえ日数

	1～3日	4～7日	8日以上
理容所	5件 (12.5%)	19件 (47.5%)	16件 (40.0%)
美容所	25件 (41.6%)	27件 (45.0%)	8件 (13.4%)

【実施方法】

(1) 調査は1961年2月7日、9日の両日午後一時より四時まで、各営業所にて直接資料をとり調査を行った。

(2) クレゾール含量の定量

試料20ccをクリーム定量用バブコック乳脂嚙にとり食塩5g、稀硫酸1cc、メチルオレンジ指示液2滴を加え飽和食塩水を目盛まで加え15秒振とう後5分放置して目盛を読み、更にエーテル1ccを加え軽く振つて不溶物の目盛を読み、その差をクレゾール量とし2.5以上を3%、2～2.4を2%、1～1.9を1%とした。

(4) 使用クレゾール水濃度

クレゾール水濃度	理容所 (40件)		美容所 (60件)	
	件数	百分率	件数	百分率
3%	17件	67.5%	17件	45.0%
2%	5件		7件	
1%	5件		3件	
1%未満	13件	32.5%	33件	55.0%

【結 論】

消毒薬としてクレゾールは全営業所に於て使用されている。クレゾールだけを単独に使用している所が35/100で35%を占める。その他の消毒薬も補助的に使用されているがホルマリンをもつと利用すべきであると考えられる。

クレゾール水濃度3%のものは理容所では17/40、で42.5%、美容所では17/60、で28.3%であつた。

調製後日数とクレゾール濃度は店に依り必ずしも比例していないが、一般的にクレゾール濃度1%以上のものは理容所では1～7日美容所では1～3日であつた。

之とクレゾールとりかえ日数から考えるとクレゾール

1%以上を常時保っているのは、理容所が60%、美容所が41.6%と推定される。

【参考文献】

1) 衛生化学 1958. 6. 1

「理容所、美容所に於けるクレゾール石鹼液の経日変化について」岩本、神沢、本間
2) 第6改正日本薬局方

ハブ毒に関する研究 (第一報)

琉球衛生研究所 化学部

外 間 善 次

【1】 ま え が き

沖縄にはハブ *Trimeresurus flavoviridis* (Hallowell)、サキシマハブ *T. elegans* (Gray)、ヒメハブ *T. okinavensis* (Boulenger)、ハイ *Hemibungarus boetgeri* (Fritze) 等の毒蛇が棲息し、これらは人畜に被害と恐怖を与えている。戦前の沖縄県衛生状態概要(昭和13年9月)によると昭和8年から同12年迄のハブ咬傷患者数は年平均111.2人であるが、戦後1959年8月の照屋寛善氏の発表によるとその数が約3倍に増加して年平均332.9人となつている。戦前はハブ毒を採毒乾燥して東京大学伝染病研究所へ送りその代償として抗ハブ血清の供給を受けていたが、戦後15年1960年10月からハブ採毒事業が本格的に再開された。生毒は夏なら1日で腐敗してしまうが、乾燥毒にして保存した場合8~9年後でもその致死作用は殆んど完全に保持されることである。

【2】 採毒から乾燥迄

採毒から乾燥迄の過程を説明すると、先ずハブの顎骨を180°近く迄開き、顎をおさえて毒腺から毒液を分泌させる。僅かに粘稠性のある帯黄色の少々不透明の液体が出るから、それを滅菌シャーレで受けとる。上顎の前方に長さ約1.0~1.6cmの1対の主牙があり、その後方に2~6対の副牙があるので毒液が採取し易い。毒腺が発生学的に消化腺から発達したものであることを考えるとハブ毒の本態は加水分解酵素であることがうなずけると思う。次にその毒液を滅菌メスピペットで計り、滅菌遠心沈澱管に入れて毎分2000回で20分遠心すると、上清液と沈澱物に分離する。それを各々別の滅菌シャーレに移し毒液をアセトンとドライアイスの寒剤中に入れ白くなる迄凍結予備乾燥をする。然る後ジャーの中に約30分間入れて予備乾燥を十分行い、次に真空度水銀圧10~3mmの真空冷凍乾燥機に入れて約4時間本乾燥をする。この際乾燥剤として5酸化磷を使用した。

【3】 毒の量的関係

採毒した蛇はハブ *T. flavoviridis* (本島産及び久米島産)、サキシマハブ *T. elegans* である。1960年10月から1961年1月迄の約4ヶ月間の累計645匹の採毒量についてサキシマハブ、ハブ(久米島産)及びハブ(本島産)に区分して統計をとつてみると図表の通りである。

【4】 む す び

飼育条件及び捕獲されて当衛生研究所へ運ばれる迄の諸条件又本島ハブの数が少い事にも関係すると思うが、以上の統計によると先島ハブはハブよりも採毒量が多く又体の大きさの割に採毒量も多い事が解る。又固形分の割合も多い。

毒の本態については今後にゆずる事にして今回はその毒の量的関係にとどめておく。

【5】 参 考 文 献

沖縄県衛生課編：沖縄県衛生状態概要
9月、(昭和13年)

表 I

種 類	数	一匹生毒cc	一匹乾燥毒g
先 島 ハ ブ	411	0.562	0.1676
ハブ(久米島産)	207	0.428	0.0977
ハブ(本島産)	27	0.622	0.1478
	645	0.523	0.1448

表 II

種 類	数	平均 cm	平均 g	匹当乾 燥毒g
先島ハブ	127	106.0	332.2	0.1990
ハブ(久米島産)	60	147.2	396.6	0.1091
ハブ(本島産)	13	149.0	540.7	0.1646